

保育者と保護者との関係形成に対する保育を学ぶ学生の見解

松山 郁夫*

Recognition of Students Learning Childcare for Relationship Formation Aspects between Caregivers and Parents

Ikuo MATSUYAMA

【要旨】本研究の目的は、保育者と保護者との関係形成に対する保育を学ぶ学生の見解を明らかにすることである。保育を学ぶ学生を対象として、保育者と保護者との関係形成に対する関心の度合いを問う、独自に作成した質問を記載した無記名方式の質問紙調査票による調査を実施した。保育を学んでいる 4 年生 74 名から回収された質問紙調査票を分析した。保育を学ぶ学生は、保育者と保護者との関係形成について、「保護者への相談支援」、「保護者との情報交換」、「保護者への活動支援」と「保護者の保育ニーズへの支援」の順に関心を向けながら、その重要性を捉えようとしていること等が考察された。

【キーワード】乳幼児、保育、保育者と保護者との関係形成、保育を学ぶ学生

I はじめに

保育の現場において子育て支援を担うためには、「保育や幼児教育の基本的な知識や技術をベースに、特性やその役割、利用者のニーズ等を十分理解し、子育て支援に必要とされる内容や方法を学ぶ必要がある」（須永, 2018）、また、幼児の遊びは学びと捉えられるように、子供達は、幼稚園、保育所、認定こども園等の生活において多種多様な経験をする。そのため、「学習面を切り取って学ばなくとも、さまざまな遊びの中で言葉や数に関する知識さえも身につけていく。こうした保育の本質について、保護者に説明できるか否か、保育者の力量が問われるところであろう」（住田・山瀬・片桐, 2013）との見方がある。

また、「子供同士や家族関係、地域社会などの影響を受けて、社会の中の保育が成り立っているのである。保育現場の一部を切り取るのではなく、その文脈が社会全体とどのように絡み合っていくのかが丁寧に検討されていく必要性があげられる」（三井, 2022）と主張されている。そのための前提として、保育者と保護者との関係形成が不可欠であろう。

その際、保育においては、保育活動のための計画を立案すること、子供と関わり保育をすること、保育における子供の様子を記録すること、これらの保育業務のなかで、「子供・保護者・上司や職員と関わる感情労働がある。この感情労働は対人援助職には必然となるものである。保育士は自己の感情をコントロールして、別の感情表現ができるように、気持ちの切り替えを行う努力をしていると考える。その表情が相手には自然体として思わせるようにするには、保育者自身の心の葛藤がある」（太田, 2022）と言及されている。

*佐賀大学教育学部

これらの見解は、保育を学ぶ学生における学ぶ内容の方向性を示していると言える。したがって、保育を学ぶ学生における保育者と保護者との関係形成に対する認識を検討することは、保育そのものや保育者養成教育を充実させるための一助になると考えられる。このため、本研究の目的は、保育者と保護者との関係形成に対する保育を学ぶ学生の認識を明らかにすることである。

II 方法

1. 調査対象

本研究では、保育を学ぶ学生を対象として、保育者と保護者との関係形成に対する関心の度合いを問う、独自に作成した質問を記載した無記名方式の質問紙調査票による調査を実施した。

調査対象は、A県B市C大学において保育士の取得を目指し、子供の家族支援に関するソーシャルワークの科目を学んでいる4年生とした。合計74名からの質問紙調査票が回収され、同票において回答者の学年・性別を質問した。分析対象者は、全員大学4年生で、男性0名(0.0%)、女性74名(100.0%)であった。

2. 調査期間と調査方法

調査期間は、2022年5月とした。

調査方法は、C大学において保育を学ぶ学生に本調査の目的を説明し、協力することを了承した大学4年生に調査票を配付し、その場で回答してもらった。

倫理的配慮として、回答は個人を特定できないように数値化して集計すること、回答の協力は任意であること、および回答への記入は無記名で行うこと等を説明し、同意を得られた学生のみ質問紙調査票を配布し、回答を求めた。

3. 質問項目の作成手順

「子ども家庭支援論」における「保護者との相互理解と信頼関係の形成」に関することを記述している章(藤高, 2019・武田, 2019・室井, 2020)を参考にして、30項目からなる質問項目を作成した。なお、この章については、正常発達の発達段階と発達の道筋に従って作成されているため、本研究で使用する質問項目作成のために使用できると判断した。

作成した30項目を3名の保育士に、保育を学ぶ学生に対する質問紙調査に使用できるかどうかを個別的に尋ねたところ、3名共、30項目すべて使用できると回答をした。そのため、質問項目すべてを質問紙調査票で使用することにした。

保育者と保護者との関係形成に対する関心の度合いを問う独自の30項目の質問項目における回答は、「まったく関心がない」(1点)、「あまり関心がない」(2点)、「どちらとも言えない」(3点)、「ある程度関心がある」(4点)、「かなり関心がある」(5点)までの5段階評価とした。なお、各質問項目について、等間隔に並べた1~5までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

4. 分析方法

以上の質問項目への回答に対する分析方法として、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。次に、各質問項目について Promax 回転を伴う主因子法による因子分析を行った。また、因子分析によって得られた各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を求めた。その際、因子ごとの項目数が異なるため、

算出された平均値を項目数で除したものを平均値として示した。各因子の Cronbach の α 係数を求め、各因子別、及び全体としての内的一貫性を有するかどうかの検証も行った。

さらに、各因子が正規分布しているか否かを確認するために Shapiro-Wilk 検定を行った ($p < .05$)。正規分布に従わないと判断された場合、Friedman 検定を行い、その後の多重比較には Wilcoxon の符号付き順位検定に Bonferroni の不等式を適用した。Friedman 検定の有意水準を 0.05 とし、その後の多重比較の有意水準は 0.0125 ($=0.05/4$) とした。なお、統計処理には、IBM SPSS Statistics 22 を使用した。

Ⅲ 結果

保育者と保護者との関係形成に対する関心の度合いを問う独自の30の質問項目に関して、各項目の平均値・標準偏差については表1の通りであった。平均値の最小値は3.15（「16. 保護者の自主的活動の支援に関すること」）で、最大値は4.47（「30. 保育士と保護者間で子供の愛情や成長を喜ぶ気持ちを伝え合うこと」）であった。全30項目中、16項目が3点台（53.3%）、14項目（46.7%）が4点台であった（表1）。

これら30項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度0.73であった。また、Bartlettの球面性検定では有意性が認められた（近似カイ2乗値 1190.56 $p < .01$ ）。このため、30項目については因子分析を行うのに適していると判断した。そのため、これら30項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は8.600、2.525、2.487、1.744、1.495、1.378、1.303、……というものであり、スクリープロットの結果からも4因子構造が妥当であると考えられた。

そのことから、4因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった8項目を除外して、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その後、さらに十分な因子負荷量を示さなかった2項目を除外して、再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の因子パターンは表2の通りであった。回転前の4因子で、項目の全分散を説明する割合は 61.06%であった。なお、これら20項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は 0.76であった。また、Bartlettの球面性検定においては有意性が認められた（近似カイ2乗値 755.257 $p < .01$ ）。

各因子のCronbachの α 係数を求めたところ、第1因子に関しては $\alpha = 0.84$ 、第2因子に関しては $\alpha = 0.79$ 、第3因子に関しては $\alpha = 0.72$ 、第4因子に関しては $\alpha = 0.78$ 、全項目に関しては $\alpha = 0.89$ との値を示したことから、各因子別に見ても、全体としても、内的一貫性を有すると判断された。

第1因子は7項目で構成され、「2. 問題解決を図る共同作業」、「15. 保護者の参加行事に関すること」、「3. 問題解決を図るための働きかけ」、「16. 保護者の自主的活動の支援に関すること」など、保育者が保護者の活動を支援することに関心を向ける内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「保護者への活動支援」因子と命名した。

第2因子は4項目で構成され、「24. 降園時の関わり」、「23. 登降園時の関わり」、「27. 園便り」、「25. 保育連絡帳等の文面での伝達」で、全体的な発達を促していくことへ関心を向ける内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「保護者との情報交換」因子と命名した。

第3因子は5項目で構成され、「8. 保護者の考え方を理解する」、「12. 保護者に対する支援の内容や方法」、「4. 保護者とのコミュニケーション」、「13. 連絡ノートや送迎時の対話」、「17. 相談・助言に関すること」で、他者と交流できるようにコミュニケーション力を高める内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「保護者への相談支援」因子と命名した。

第4因子は4項目で構成され、「21. 障害や発達上の課題がある子どもの保護者に対する支援」、「20. 保護者のニーズに応じた多様な保育サービスの実施」、「29. 家庭訪問・個人懇談」、「22. 保護者に不適切な養育が疑われる場合の支援」で、保護者の保育ニーズに対応した支援に関する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「保護者の保育ニーズへの支援」因子と命名した。

因子別の平均値は、第1因子3.57 (SD 0.61)、第2因子3.97 (SD 0.65)、第3因子4.24 (SD 0.53)、第4因子3.71 (SD 0.72) であった。

各因子について Shapiro-Wilk 検定を行った結果、各統計量は、第1因子.985 ($p > .10$)、第2因子.957 ($p < .05$)、第3因子.941 ($p < .01$)、第4因子.933 ($p < .01$) であったため、第1因子は正規分布しているが、第2因子、第3因子、第4因子は正規分布していないことが示された。これら4因子間に対する Friedman 検定の結果、各平均ランクについては第1因子 1.73、第2因子 2.68、第3因子 3.33、第4因子 2.26、カイ2乗値が 63.52 ($p < .01$) で有意差が認められた。

その後、Wilcoxon の符号付き順位検定を行った結果、各因子の平均値間において、第1因子「保護者への活動支援」と第4因子「保護者の保育ニーズへの支援」には有意差が認められなかった。それ以外の、第1因子「保護者への活動支援」と第2因子「保護者との情報交換」、第1因子「保護者への活動支援」と第3因子「保護者への相談支援」、第2因子「保護者との情報交換」と第3因子「保護者への相談支援」、第2因子「保護者との情報交換」と第4因子「保護者の保育ニーズへの支援」、第3因子「保護者への相談支援」と第4因子「保護者の保育ニーズへの支援」に有意差が認められた(表3)。このため、保育を学ぶ学生は、保育者と保護者との関係形成について、第3因子「保護者への相談支援」、第2因子「保護者との情報交換」、第1因子「保護者への活動支援」と第4因子「保護者の保育ニーズへの支援」の順に関心を向けていることが示唆された。

表1 保育者と保護者との関係形成に関する質問項目における平均値・標準偏差

質問項目	平均	標準偏差
1. 援助に必要な情報を得る	3.97	0.79
2. 問題解決を図る共同作業	3.65	0.78
3. 問題解決を図るための働きかけ	3.61	0.86
4. 保護者とのコミュニケーション	4.45	0.69
5. 保護者を個人としてとらえる	4.00	0.91
6. 保護者の感情表出を大切にする	4.41	0.66
7. 援助者は自分の感情を自覚し、保護者の感情に呑み込まれない	4.00	0.86
8. 保護者の考え方を理解する	4.39	0.64
9. 保護者の行動や思考に対して援助者は善悪を判断しない	4.01	0.75
10. 保護者の自己決定を尊重する	4.12	0.79
11. 保護者の秘密を保持して信頼感を醸成する	4.23	0.87
12. 保護者に対する支援の内容や方法	4.20	0.91
13. 連絡ノートや送迎時の対話	4.34	0.75
14. 園内の掲示など、日々のコミュニケーションに関すること	3.85	0.95
15. 保護者の参加行事に関すること	3.34	0.85
16. 保護者の自主的活動の支援に関すること	3.15	0.86

17. 相談・助言に関すること	3.84	0.86
18. 伝達と説明の努力	3.66	0.90
19. 保護者の仕事と子育ての両立等への支援	3.99	0.87
20. 保護者のニーズに応じた多様な保育サービスの実施	3.88	0.94
21. 障害や発達上の課題がある子どもの保護者に対する支援	3.93	0.96
22. 保護者に不適切な養育が疑われる場合の支援	3.77	0.90
23. 登降園時の関わり	4.11	0.82
24. 降園時の関わり	4.20	0.72
25. 保育連絡帳等の文面での伝達	4.15	0.84
26. 低年齢児保育に保育連絡帳を使用すること	3.95	0.94
27. 園便り	3.42	0.94
28. 学級便り	3.39	0.89
29. 家庭訪問・個人懇談	3.27	0.91
30. 保育士と保護者間で子供の愛情や成長を喜ぶ気持ちを伝え合うこと	4.47	0.62

n=74

表2 保育者と保護者との関係形成に関する質問項目における因子分析結果

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子「保護者への活動支援」				
2. 問題解決を図る共同作業	.781	.011	.143	.128
15. 保護者の参加行事に関すること	.705	.120	.097	.191
3. 問題解決を図るための働きかけ	.632	.070	.182	.035
16. 保護者の自主的活動の支援に関すること	.576	.116	.174	.144
1. 援助に必要な情報を得る	.559	.140	.237	.019
28. 学級便り	.555	.378	.263	.056
14. 園内の掲示など、日々のコミュニケーションに関すること	.549	.115	.091	.108
第2因子「保護者との情報交換」				
24. 降園時の関わり	.331	.949	.217	.121
23. 登降園時の関わり	.013	.828	.035	.137
27. 園便り	.513	.540	.244	.118
25. 保育連絡帳等の文面での伝達	.280	.432	.158	.215
第3因子「保護者への相談支援」				
8. 保護者の考え方を理解する	.157	.139	.693	.128
12. 保護者に対する支援の内容や方法	.126	.054	.507	.047
4. 保護者とのコミュニケーション	.232	.043	.506	.002
13. 連絡ノートや送迎時の対話	.153	.374	.467	.151
17. 相談・助言に関すること	.406	.137	.446	.042
第4因子「保護者の保育ニーズへの支援」				
21. 障害や発達上の課題がある子どもの保護者に対する支援	.078	.066	.092	.720
20. 保護者のニーズに応じた多様な保育サービスの実施	.130	.003	.111	.707

29. 家庭訪問・個人懇談	.328	.041	.236	.538
22. 保護者に不適切な養育が疑われる場合の支援	.198	.019	.219	.436

n=74

表3 保育者と保護者との関係形成に関する質問項目における各因子間の比較

因子間	度数	平均ランク	順位和	検定統計量Z
第2因子<第1因子 負の順位	19	23.76	451.50	-4.94* (負の順位に基づく)
第2因子>第1因子 正の順位	54	41.66	2249.50	
第2因子=第1因子 同順位	1			
第3因子<第1因子 負の順位	5	18.50	92.50	-6.79* (負の順位に基づく)
第3因子>第1因子 正の順位	66	37.33	2463.50	
第3因子=第1因子 同順位	3			
第4因子<第1因子 負の順位	27	33.33	900.00	-2.32 (負の順位に基づく)
第4因子>第1因子 正の順位	45	38.40	1728.00	
第4因子=第1因子 同順位	2			
第3因子<第2因子 負の順位	24	27.69	664.50	-3.39* (負の順位に基づく)
第3因子>第2因子 正の順位	46	39.58	1820.50	
第3因子=第2因子 同順位	4			
第4因子<第2因子 負の順位	39	36.51	1324.00	-2.58* (正の順位に基づく)
第4因子>第2因子 正の順位	25	26.24	656.00	
第4因子=第2因子 同順位	2			
第4因子<第3因子 負の順位	55	41.12	2261.50	-6.09* (正の順位に基づく)
第4因子>第3因子 正の順位	15	14.90	223.50	
第4因子=第3因子 同順位	4			

n=74 * $p < .05/4$ (= .0125)

IV 考察

本調査によって、保育者と保護者との関係形成に対する保育を学ぶ学生の関心の度合いを問う、独自に作成した30項目の質問項目に関して、3点台が53.3%、4点台が46.7%であった。保育を学ぶ学生は、保育者と保護者との関係形成に対する関心については、高いとは言えないがある程度関心を持っていることが窺える。今後、子育て支援における質の向上が求められるが、その際、保育者と保護者との関係形成が、支援の質に影響を及ぼすものと考えられる。

保育者と保護者との関係を形成するためには、お互いコミュニケーションをとることが不可欠である。その場合、「保護者の視点を踏まえたコミュニケーションを取るために、保育者は保護者を理解しなければならない。保育中に見られる子供の姿を知らない保護者に、その姿を伝える場合でも、保護者の理解を確認しながら進める必要がある」（張・真下, 2019）と主張されている。そのため、保育を学ぶ学生には、保育者と保護者との関係を形成するために、多様な視点から保護者についての理解を深めていく必要があると言える。また、「日々、クラス前に掲示するホワイトボード、およびお便り帳の記述で子育て支援を行っているとの意識をもつことで、記述内容が変わり、子供をみる目も変わるはずである。地道な道のりではあるが、日々の保育の発信への努力が保育士自身を変え、保護者の意識を変え、安定し

た親子関係の構築と保護者の養育力の向上につながる」(小嶋, 2020)と記述されている。これらのことから、第1因子「保護者への活動支援」は、保育者が保護者への活動を支援することが、保育者と保護者との関係形成に影響を及ぼすことに、関心を持って捉えようとしていることを表しているものと推測される。

コミュニケーションツールの一つとして連絡帳が使用されている。そこに記述されている内容を分析した結果から、「一人の子供の育ちを保護者と保育者双方が共有し、保護者と保育者の相互理解が促進されているプロセスが確認でき、連絡帳は保護者支援の重要な方法の一つとなり得ることが明らかになった」(林, 2015)と報告されている。さらに、保育者が保護者に対して配慮すべきこととして、「子供の育ちが保護者によく見えること、情報を共有すること、保育の意図、目的、子供の変化など目で見えることが重要である」(伊藤, 2017)と主張されている。そのため、保育者には、保護者に対して情報交換を着実にやっていくことが求められる。したがって、第2因子「保護者との情報交換」は、保育を学ぶ学生が、保育者と保護者との関係形成を重視すれば、保育において、日々、保護者との情報交換が可能になることに対して、関心を持っていることを表しているものと判断される。

現在、保育における保護者の抱える相談内容については多様化・複雑化している。保育においては、子供への対応だけでなく、保護者に対する相談支援がますます重要になっている。そのため、保育者養成教育においては、「現状に対応できる保育者をどのように養成すべきか、保育者養成教育全体の課題として、議論すべき問題である」(須永, 2018)、また、「保育者として身につけておくべき能力や技術面に定義づけをし、客観的な指標・尺度を用いて評価・測定することで、学びの達成度を実感することができる」(江莉川, 2022)と指摘されている。保育者養成教育においては、保護者に対する相談支援について深く学ぶことができるような授業が展開されている。したがって、第3因子「保護者への相談支援」は、保育を学ぶ学生が、保育者と保護者との関係形成においては、保護者への相談支援を重視していること表しているものと窺える。

保育者と難しい保育ニーズを持つ保護者との関係について、「普段からの保護者とのコミュニケーションが図られていれば、お互いの考えや思いを伝えあうことで、解決が図れるケースは少なくない。そのためには、保育者自身のコミュニケーション能力の向上は今後ますます求められる」(須永・青木・齋藤・山屋, 2012)、また、保育を学ぶ学生に対して、「ソーシャルワークを保育士の専門技術として位置づけ、教育することが必要である。実際の現場で子育て支援や家族支援ができることを目標とした、学習内容の工夫がさらに必要である」と言及されている。これらのように、保護者の保育ニーズに対応することが重視されている。それ故、第4因子「保護者の保育ニーズへの支援」は、保育を学ぶ学生において、保育者が保護者との関係を形成しながら、保護者の保育ニーズをソーシャルワークの観点から捉え、解決を図る重要性を理解することが不可欠だと考えていることを示しているものと考えられる。

保護者への相談支援を行うためには、子供の発達課題を保育者が保護者と共有しておく必要がある。そのためには、「連携を可能とする保護者との関係構築や、保護者自身の養育ニーズへのアプローチが重要である」(亀崎, 2017)と指摘されている。その際、保育者と保護者との情報交換が不可欠である。一例として、食事の連絡帳に関する保育士と保護者との長期間におけるやりとりから、保育士と保護者の単なる子供の食事に関する情報交換の道具として使用されていた状況があったことが報告されている。このことについて、「保育士と保護者が、毎日子供の食事に関する情報交換を続ける中で、次第に連絡帳は、保育士と保護者が連携して子供を支援するための媒介物としての役割も果たすようになっていった。保護者は、子供の成長を実感したり子育ての不安を軽減したりすることができ、食事の連絡帳に

よる子育て支援や保護者支援の効果が示された」(伊藤, 2017)と述べられている。また、保護者への活動支援の一例として、保護者参加の園の行事について、幼稚園での実践報告では、「保護者自身を楽しむことのできる活動を通して、子育ても楽しんでいくことができるよう、機会を作ったり、活動への援助をしたりすることも、現在の幼稚園の機能としては大切なことなのではないだろうか。保護者の育児に対する意識を啓発する場、保護者自身が育児を学ぶ場、保護者が育児の楽しさを感じ取ることのできる場としての意義がある」(奥山, 1997)とされている。さらに、保護者の価値観の多様化に伴い、「今後ますます保護者による保育に対するニーズは多様化と増加の傾向を深めていくことが十分予想される。対応策の中核に、子供の最善の利益という視点があることを忘れてはならない」(須永・青木・齋藤・山屋, 2011)と論及されている。

上記の見解から、保育者と保護者との関係形成ができていれば、保護者への相談支援が容易になる。その際、保護者との情報交換が欠かせない。これらを踏まえながら、保護者への活動支援や保育ニーズへの支援が行われることになる。したがって、保育を学ぶ学生は、保育者と保護者との関係形成について、「保護者への相談支援」、「保護者との情報交換」、「保護者への活動支援」と「保護者の保育ニーズへの支援」の順に関心を向けているものと推察される。

本研究においては、被調査者が74名であったため、再度、被調査者を増やして本論と同様の見解が得られるかどうかを確認する必要がある。今回の研究で得られた知見から、今後の課題は、保育を学ぶ学生が、保育者と保護者との関係形成について理解を深めるためには、「保護者への活動支援」、「保護者との情報交換」、「保護者への相談支援」、「保護者の保育ニーズへの支援」の4つの視点から、どのようなことを学んでいけばよいのかを明確にすることだと考えられる。

V 結 論

本研究では、保育者と保護者との関係形成に対する保育を学ぶ学生の見解を明らかにすることを目的として、独自に作成した無記名方式の質問紙調査票を使用した調査を実施し、74名の有効回答を分析した。保育を学ぶ学生は、保育者と保護者との関係形成について、①高いとは言えないがある程度関心を持っている。②保育者が保護者への活動を支援することが、保育者と保護者との関係形成に影響を及ぼす。③保育者と保護者との関係形成を重視すれば、保育において、日々、保護者との情報交換が可能になる。④保護者への相談支援を重視している。⑤保護者の保育ニーズをソーシャルワークの観点から捉え、解決を図る重要性を理解することが不可欠だと考えている。⑥「保護者への相談支援」、「保護者との情報交換」、「保護者への活動支援」と「保護者の保育ニーズへの支援」の順に関心を向けている。これらの6点が示唆された。

謝 辞

本研究にご協力いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 張 貞京・真下知子 (2019) 保護者－保育者間のコミュニケーションに関する保育者の語り. 京都文教短期大学研究紀要, 57, 13-21.
- 江莉川淳子 (2022) 保護者支援のあり方を習得するための授業方法に関する一考察(第2報) ～「保育相談支援」がよりよい学生への学びになるために～. 柴田学園研究紀要, 1(1), 25-37.

- 藤高直之（2019）保護者および地域が有する子育てを自ら実践する力の向上に資する支援. 松原康雄・村田典子・南野奈津子編集, 子ども家庭支援論, 中央法規出版, 73-84.
- 林 悠子（2015）保護者と保育者の記述内容の変容過程にみる連絡帳の意義. 保育学研究, 53(1), 78-90.
- 伊藤 優（2017）乳児に対する保育士と保護者の連絡帳を用いた連携の様相. 保育学研究, 55(3), 33-45.
- 伊藤祐子（2017）保育所保育における保護者との協働・連携のあり方. 千葉敬愛短期大学紀要, 39, 239-247.
- 亀崎美沙子（2017）保育相談支援における保育士の葛藤—「気になる子ども」の保護者との関係変容に伴う支援の質的転換に着目して—. 十文字学園女子大学紀要, 47, 37-48.
- 小嶋玲子（2020）保育所の特性を生かした子育て支援—保護者が支援されていると思わないところでの支援—. 桜花学園大学保育学部研究紀要, 21, 61-73.
- 三井真紀（2022）保育における「隠れたカリキュラム」の存在. 心理・教育・福祉研究：紀要論文集, 21(2), 53-61.
- 村田典子・南野奈津子編集, 子ども家庭支援論（新・基本保育シリーズ）, 中央法規出版, 74-84.
- 室井佑美（2022）保育所等を利用する子どもの家庭への支援. 原 信夫・松倉佳子・佐藤ちひろ編著, 子ども家庭支援論, 北樹出版, 75-85.
- 奥山順子（1997）幼稚園と家庭との連携—園行事の実施と幼稚園教育の役割—. 秋田大学教育学部教育工学研究報告, 19, 113-124.
- 太田早津美（2022）保育における感情労働について—保育士は対人援助職として感情労働をどのように感じているか—. 桜花学園大学保育学部研究紀要, 25, 37-49.
- 住田正樹・山瀬範子・片桐真弓（2013）保護者の保育ニーズに関する研究—選択される幼児教育・保育—. 放送大学研究年報, 30, 25-30.
- 須永 進・青木知史・齋藤幸子・山屋春恵（2011）保護者の保育ニーズとその対応に関する研究Ⅱ 愛知淑徳大学論集, 福祉貢献学部篇, 1, 83-105.
- 須永 進・青木知史・齋藤幸子・山屋春恵（2012）保護者の保育ニーズとその対応に関する研究Ⅲ. 愛知淑徳大学論集, 福祉貢献学部篇, 2, 51-68.
- 須永 進（2018）保育者養成の視点による子育て支援教育について. 三重大学教育学部研究紀要, 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学・教育実践, 69, 341-347.
- 武田洋子（2019）保護者との相互理解と信頼関係の形成. 松村和子編著, 子ども家庭支援論, 建帛社, 168-184.